The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞山崎勝昭著『萩原広道』上・下
Author(s)	河野, 光将
Citation	語文. 2017, 106-107, p. 183-184
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/70997
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

山崎勝昭著『萩原広道』上・下

河　野　光　将

本書は、『源氏物語評釈』の著者として知られる萩原広道についての伝記的研究である。まずは、本書の構成を細目は省略して示すと以下の通りである。

（上巻）

第一部　岡山時代の広道

Ⅰ　岡山時代前期　文化12年～天保9年

Ⅱ　岡山時代後期　天保9年～弘化2年

Ⅲ　岡山から大坂へ　弘化2年

第二部　大坂時代の広道

Ⅳ　京町堀時代　弘化2年～弘化3年

Ⅴ　北野村時代　弘化3年～嘉永元年

Ⅵ　高麗橋時代（上）　嘉永元年～嘉永2年

Ⅶ　高麗橋時代（中）　嘉永2年～嘉永3年

Ⅷ　高麗橋時代（下）　嘉永4年

（下巻）

Ⅸ　江戸堀南時代（上）　嘉永5年～嘉永6年

Ⅹ　江戸堀南時代（下）　嘉永6年～安政元年

Ⅺ　江戸堀北時代（上）　安政元年～安政4年

Ⅻ　江戸堀北時代（下）　安政5年～文久3年

第三部　別編

一　《幕末類題集》運動と広道

二　『源氏物語評釈』と広道

引用資料略記一覧／萩原広道年譜／あとがき／人名索引

広道の伝記的研究は本書の第一部と第二部にあたるが、この部分だけで一〇〇〇頁をゆうに越えており、単に広道の伝記研究に止まらず、広道の周辺人物についても詳細な言及がなされる。これは、「あとがき」にも述べられているが、一般的な伝記の中には個人を顕彰せんがためにややもすれば客観性を欠く記述に陥っているものもある。本書は、そうした陥穽を避けるため積極的に広道の周辺人物に対しても言及することで、「複眼的多眼的」視点から広道に迫っている。一例を挙げれば、幕末国学者には音義言霊を説くものが少なからずおり、それは国学自体が内包していた思想的傾向のひとつの現れ方でもあった。しかし、広道自身は、師である野々口（大国）隆正とは異なり、音義言霊論へは批判的であったことが述べられる。普通の伝記であれば、そのことを示す際、広道の言説のみを取り挙げれば事足りるように思えるが、本書では、隆正の言説についても丁寧に示されており、一読して広道と隆正の差異を知る事ができる。私感を述べれば、この音義言霊説に対する広道と師隆正の態度の違いをみると、本居宣長『玉勝間』「師の説になづまざる事」が思い起こされ、広道の学問

的態度を考える上で興味深い。

右の例は、本書の特徴を示すための一例であるが、本書の魅力は、良い意味での「脱線」ともいうべき記述が豊富であることによって、広道研究のみならず他の人物について考える上でも示唆に富んでいるという点にあろう。本書のそうした魅力を支えているのは、丹念な資料博捜であり、そのことにより広道を軸とした幕末文化人の交流の実態を実証的に描き出すことを可能としている。

第三部に収められる二本の論考についても、こうした丹念な調査に基づくものであり、広道について研究する者はもちろん、近世期の出版文化史を考える上でも裨益するところ大である。

近世における人的交流は意外な所の意外な人との繋がりがあることがままある。しかし、書簡などからそうした「繋がり」を狙って探し出すことは容易な作業ではない。さらに、幸運にして「繋がり」を発見できたとしても、次に待っているのは、その「繋がり」が持つ意味について考えるということである。本書は、著者の長年の調査の成果をまとめたものとして、広道の周辺における実に様々な「繋がり」を明らかにしている。巻末に附される人名索引を見れば、広道の交友圏の広さが窺えるが、本書はこれを読む者の関心に応じて様々な展開が可能であり、そのことが本書の最大の価値と言えよう。

なお、付言すれば、本書の書名が『萩原広道』であることについて著者は「あとがき」で、中村真一郎『頼山陽とその時代』を引き合いに出し、山陽に比べ広道が有名でないことから、「萩原広道とその時代」という書名にしなかったことを述べている。確かに山陽と広道が同じ位置付けが可能かどうかと問われれば難しいが、しかし、本書の射程に収めるものが、『萩原広道』という書名を一見するだけは想像も出来ないほど、豊かなものであることが却って伝わりにくくなったと思われる点が惜しいように感じる。

本書は、幕末という社会的・思想的にも様々な変化が生じてくる時期を考える上で大いに参考になるだけでなく、近世の文学・語学研究に携わる者全てに大きな示唆を与えてくれるものである。

（ユニウス、二〇一六年三月、全二巻、七八六・六八六頁、一二、〇〇〇円＋税）

（こうの・みつまさ　本学大学院博士後期課程）